

ホプキンスの「地獄の黙想」と晩年のソネット群

大 野 隆

G. M. ホプキンスは、自身の『霊的著作』の中の「地獄の黙想」で、イグナチウス・ロヨラの『霊操』に部分的で私的な注釈をつけた¹。彼の『霊的著作』には「地獄の黙想」についての注釈が二編収められている。ひとつは1879年12月から1882年8月の間に、ボーモンドロッジでの長い黙想などを通して書かれた²。それは『霊操』第一週の第一霊操から第五霊操「地獄の黙想」までの網羅的な注釈である。もうひとつは1882年にカンバーランドで四旬節の務めとして行なった第五霊操「地獄の黙想」についての断片的注釈だ。

彼のふたつの「地獄の黙想」は、イグナチオの霊操の流儀に従って書かれている。「地獄の黙想」とホプキンス晩年のソネット群との関連については、すでに指摘があり、晩年のソネット群のひとつに、『霊操』の特徴を見る研究もある³。ホプキンスは、1879年から1880年代の前半に「地獄の黙想」を二度書いた後、1888年の黙想会でのメモの中でも次のように書いた。「今はしているのだが、黙想会の時や、またやるぞ、という時以外は、黙想をするのをあきらめるようになった。」と⁴。この箇所は、彼がいかに日常的に黙想を実践していたかを、逆に示している。

「地獄の黙想」をしたおよそ5年後の1885年9月の手紙では、この頃書いた5篇かそれ以上のソネットの内、4篇が「招かれざる靈感のように、私の意志に反してやってきた」とホプキンスは述べた⁵。これらのソネット群は、前述の1888年の手紙から判断すると、断続的ではあるが霊操の流儀で黙想をしていた時期のものである。このことからホプキンス晩年のソネット群が霊操、とりわけその中の「地獄の黙想」に関係があることは、十分推察できる。本稿では、ノーマン・H・マッケンジーがこの「招かれざる靈感のようにやってきた」4篇のソネットの内のひとつであると見る‘I wake and feel’を扱う⁶。またホプキンス晩年のソネットの内、ふたつの「地獄の黙想」とほぼ同じ1885年に初稿が書かれた‘(Carrion Comfort)’、さらに執筆時期は不明だがこの時期のものとされる‘My own heart’なども取り上げる⁷。そしてホプキンスの「地獄の黙想」と「招かれざる靈感」によって書かれた晩年のソネット群との内容的関係を探りたい。

1879年から1882年の内に書いた最初の「地獄の黙想」で、ホプキンスはアビラの聖テレジアの名前を挙げ、この修道女が見た幻について言及した⁸。彼は、テレジアについて『日誌』にも一度触れているが、内容はともに彼女の見た地獄の幻についてである⁹。テレジアの幻では、地獄の中では、

魂が絶えず体から引き裂かれるかのような、と言っても、ほとんど何も言わぬに等しい。というのは、それはひとつの命が、他の命に奪われるという意味だからだ。なぜなら、この場合、魂自身をばらばらに引き裂くのは、魂それ自身であるからだ。・・・それは最も嘆かわしい拷問や苦痛よりももっとひどいものだ。私には何者がそれらを引き起こしたかはわからなかったが・・・それとともに手足が切り離されていたかのように当時感じたし、今も思うのである。(『自叙伝』第32巻)¹⁰

アビラのテレジアの幻では、地獄で肉体は引きちぎられる。彼女は、彼女自身を引き裂く力の強さを強調した。しかもその破壊力は、自分の魂自身から来る¹¹。

ホプキンスの「地獄の黙想」でも、最後の審判を受ける前に、死者は靈魂と身体とが引き裂かれ、死者の魂は自分がまとう苦悩の火で焼かれ、ばらばらになる。一方、精神は破壊されないままに残り、苦しむ¹²。そこでは、地獄の魂について、「彼らの罪はひとたび味わわれると苦味そのものだが、今度はもっと苦い味がし、彼ら自身以外のどんな虫も彼らをかじらない」(“...their sins are the bitterness tasted once, now taste more bitter, no worm but themselves gnaws them...”¹³)と述べられる。また他の箇所でも「そのとき自責の念を持つあらゆる罪のため、また自責の念という拷問とその拷問の火によって、われわれはわれわれ自身の苦しめ手なのである」(“we are our tormentors, for every sin we then shall have remorse and with remorse torment and the torment fire”¹⁴)とも述べられる。

1885年のものとされる‘Spelt from Sibyl's Leaves’で描かれた善と悪とが真っ二つに分かれた終末の世界の隠喩—「拷問台(a rack)」の描写の中にも、「自己」は「自己に苦しめられ、自己に縛られ、鞘もなく避難所もない想念と/想念とがぶつかりうめき声を立てて軋る拷問台」(“a rack/ Where, selfwrung, selfstrung, sheathe- and shelterless, thoughts/ against thoughts in groans grind”)という表現で描かれる。「想念」(thoughts)は、「自己によって苦しめられ」(selfwrung), 「自己によって縛られ」(selfstrung)ている。人間の主観「想念」が、ここでは地獄の魂の類比物として、それ自身を苦しめるものとして描かれる。

ソネット‘I wake and feel’でも、語り手の「自己」¹⁵(self)は、ムチ(“scourge”)として表現される。ホプキンスにおいても地獄の魂とは、彼らの「自己」がムチと化し、自らを苦しめる者となるはずのものだ。

同じ頃に書かれたソネット 'My own heart' の冒頭部分も、精神 (mind) の描写が受動的に「苦しめられる」(tormented) ものと能動的に「苦しめる」(tormenting) ものに分けて描かれる。

My own heart let me more have pity on; let
Me live to my sad self hereafter kind,
Charitable; not live this tormented mind
With this tormented mind tormenting yet.

私自身の心が. 私にもっと憐れみをかけさせ—
今後 自分の悲しい自己に親切に, 慈悲深く生きることが
させてくれたら。この苦しむ精神が
この苦しむ精神によって
なおも苦悩を与え 生きることがないようにしてくれたら。

にもかかわらずこの両者は別物ではなく, with で繋がられている。ここでも, 実は苦しめるものが苦しめられるものである。

ソネット 'My own heart' では, さらに矛盾存在としての自己が描かれる。

I cast for comfort I can no more get
By groping round my comfortless. than blind
Eyes in their dark can day or thirst can find
Thirst's all-in-all in all a world of wet.

私はもはや得ることのできない慰めを捜す
私の慰めのない世界を手探りすることによって。盲目の
眼が闇の中で昼を見いだせず また渇きが全く湿った世界の中で
渇きの最愛の物を見いだせないのと同じように。

「慰めを捜す」(I cast for comfort) という語り手の行為に対し, その慰めは「わたしが得ることがもはやできない」(I can no more get) と断定される。「慰めのない」(comfortless) と決まった世界「を手探りする」(groping round) という語り手の矛盾は明らかだ。さらに盲人が闇の中に昼を求めたり, 一面濡れた水の世界に渇きを満たすものが見出せないという喩えも矛盾を描く。矛盾存在とは, 地獄の魂の姿であるが, このソネットは語り手自身にもあてはまる。

ホプキンスの1873年9月の『日誌』にも、アビラのテレジアへの言及がある¹⁶。

私はその夜悪夢を見た。何者なのかわからないが、私の上に跳び乗り、私にとてもしっかりと抱きついたと思った。私が思うに、このことで私は目を覚ました。それでこの後、理性が使えたのだろう・・・この何者かが胸につかまり、それ以上、何もしなかった。それで私は話すことができた、最初は小聲で、それから前より大声で、である。・・・私はその他のところでは、すべての筋肉の緊張を失っていた。・・・その感じはおそろしいものだ。もはや神経や筋肉内部の力では、ひとかけらも動くことはなく、その体はめり込み、死んだ重いもののよう、胸にすがりついた。・・・それによって私は、これこそが地獄の靈魂が彼らの肉体に幽閉されている有様だと思うようになった。そして聖テレジアが彼女の見た幻の中で彼女自身がいると感じた「壁の小さな押し型」¹⁷について言うことを思い起させた。

この『日誌』で夢魔は詩人の胸に乗る。金縛りにあった詩人は、手足を動かすことができなかったがその感覚は、「怖ろしい」(terrible)もの、と述べられた。この夢魔は、1885年のソネット 'Carion Comfort' に登場する怪物に酷似する。それは

But ah, but O thou terrible, why wouldst thou rude on me
Thy wring-world right foot rock?

だが ああ、だがなんと恐ろしい者よ、なぜおまえは
世を苦しめるおまえの右の足を
私の上で荒々しく揺すろうとしたのだ？

と謳われた¹⁸。

また、1873年の夢魔体験で、ホプキンスは夜に「私が思うにこのことで私は目を覚ました」(This I think woke me)とも述べた。ソネット 'I wake and feel' の冒頭でも語り手は、

I wake and feel the fell of dark, not day.

私が目覚めて、感じるのは闇の獣皮であり、昼ではない。

と、自分が「目覚める」ところから始める。それは睡眠からの目覚めではない。『日誌』の経験で詩人が憑依を受けた夢魔は、彼「の上に飛び乗り」(leaped onto)、彼に「とて

もしっかり抱きつく」(hold...quite fast)。それは動物的存在である。‘I wake and feel’で語り手が触れるのも「毛皮」(fell)である。この夢魘はアビラのテレジアが地獄の幻で述べた「檻の中の熊」のような獣性を帯びている。

‘I wake and feel’の冒頭では、語り手「私」は闇の「膚」(fell)を感じる。ホプキンズは、ユングフラウにある氷河の形状を表現するために、この語を用い「白虎の皮か「なにか他の動物の厚さのある毛皮」(the deep fell of some other animal)」と表現した¹⁹。fellには「毛皮」という意味がある。アビラのテレジアは地獄の魂を「檻の中の熊」(a caged bear)と表現した²⁰。ソネット‘I wake and feel’の語り手は、ソネット‘(Carrion Comfort)’と同じく怪物「闇」の感触をfellという言葉で表現した、と考えられる。

このソネット後半の6行連句では、語り手は自分を「胆汁」,「胸やけ」という〈嘔吐〉の隠喩で点描する²¹。また語り手が「私は胆汁だ」と語るとき、「胆汁」(gall)とは、人間のものではなく、動物のものである。語り手「私」は、人間ではなく獣である。それは‘(Carrion Comfort)’の怪物を連想させる。

ソネット‘(Carrion Comfort)’で、語り手は、語り手自身を苦しめる怪物に襲われる。この怪物は、さらに語り手の上に乗る、貪婪な眼差しを見せる。

But ah, but O thou terrible, why wouldst thou rude on me
Thy wring-world right foot rock? lay a lionlimb against me?
scan
With darksome devouring eyes my bruised bones?

だが ああ、だがなんと怖ろしい者よ、なぜおまえは
世を苦しめるおまえの右の足を
わたしのうえで荒々しく揺すろうとしたのだ？
暗い貪婪な眼で傷ついたわたしの骨を眺めまわそうとしたのだ？

行為者の怪物と被行為者の「私」は、詩の冒頭では主客転倒して描かれる²²。

Not, I'll not, carrion comfort, Despair, not feast on thee;
Not untwist—slack they may be—these last strands of man
In me

いやだ、私はいやだ、腐肉の慰めよ、絶望よ、おまえをたのしんだりはしない。
どんなにゆるんでいようとも、
わたしのうちのこの人間の最後の撚糸をほどいたりしない。

「私」は、「腐肉」(carrion)を「見て楽しむ」(feast on)ことを欲する。またこの怪物は、腐肉をむさぼり食い、その肉の「撚糸」(strands)を「ほどく」(untwist)ことを願う²³。怪物「私」が食おうと欲する腐肉の繊維—「撚糸」(strands)は、実は死体である「私」(me)のものである。怪物「私」は、「私」(me)という死体を「見て楽しむ」(feast on)。そしてその肉の筋「の撚りをほどく」(untwist)。語り手「私」は何者かを襲う怪物である。意志による拒否にもかかわらず、である。

‘I wake and feel’では、「私は私の味がした」とまるで自分を賞味したかのような表現をする。この場合、客体化された「私」の肉を食し、それに舌鼓をうつ無色透明の主体が存在するはずだ。続く「骨」、「肉」、「血」の点描の背後に、語り手自身の苦味を感じ取る行為の主体が存在が浮かび上がる。

‘I wake and feel’の語り手は、「私は胆汁だ」と述べ、自身を「苦味」(bitter)と関連づける。「胆汁」(gall)という語は“the gall of bitterness”という成句を読者に連想させ、〈(神への)激しい恨み〉をさらに連想させる。また同じ語り手は「私は胸やけだ」とも述べるが、「胸やけ」(heartburn)には、「恨み」という意味がある。語り手は、自分が何者かの「恨み」であることを示唆する。

この「恨み」と関連する別の存在は、

Bones built in me, flesh filled, blood brimmed the curse.

という一行の中に示される。通常の語順では、brimmedの後にwithが欠落している。しかし、この一文を「のろい」(the curse)を主語とする倒置文と読めば、withの欠落の理由が、実は語順が入れ替えられたことによることがわかる。「呪いが わたしの内に 骨を組み立て、肉を満たし、血をあふれさせたのだ。」という意味が実は潜んでいる。この文脈では、語り手は創造主「呪い」が心にいだく「恨み」である。語り手は、存在者「呪い」によって創造され、それと相関的な生を送る。この「呪い」とは、語り手の「自己」に等しい²⁴。

『霊的著作』では「地獄の大きな悪とは神の喪失である。」²⁵と述べた。‘I wake and feel’の語り手は謳う。

And my lament

Is cries countless, cries like dead letters sent
to dearest him that lives alas! away.

そしてわたしが歌う嘆きの歌

とは無数の叫び、
 もっともいとおしく ああ！ 離れてくらす あの方に向けて
 送られたが届かぬ手紙に似た叫びだ。

神は、‘I wake and feel’ では、不在である。このソネットでは、神の代わりに〈神にとって代わるもの〉として「自己」が怪物として描かれる²⁶。

このソネットの最後4行では、地獄の魂の「自己」は、さらに〈酵母〉にも喩えられる。

Selfyeast of self a dull dough sours. I see
 The lost are like this, and their scourge to be
 As I am mine, their sweating selves; but worse.

霊に加えられた自己酵母は不活発な練り粉を酸敗させる。わたしにはわかる
 地獄に堕ちた魂はこれに似ていると、そして彼らの鞭は
 わたしがわたしの鞭であるように、彼らの汗する自我であるはずだと—
 だがもっとひどい。

墮獄の魂は、語り手によれば、本来、自らの悪意や邪悪のせいで「発酵する」(sweating) 自己を持ち、それが彼らの鞭となるはずである²⁷。それは、アビラのテレジアが言う「それ自身を引き裂いているのは魂それ自身である。」(it is the soul itself that is tearing itself to pieces.) という状態である。しかし、詩の最後4行では、使徒パウロが警戒した悪意と邪悪の練り粉が膨張するさまは、描かれていない。また、練り粉は、無酵母の状態でも描かれていない。練り粉に酵母菌が入っても、通常起こるはずの発酵ここでは起こらない。逆に sours という動詞が示すように、酸化と分解とが起こる。地獄の魂に潜む酵母「自己」は、彼ら自身の肉体という「不活発な練り粉」をむしばむ。ここでは末尾の「もっと悪い」(worse) という言葉により、未来のもっと悪い状態、すなわち「生命が消え去ったあのかす、死体、」が最後に示される²⁸。それは、1888年の‘That Nature is a Heraclitean Fire’で

Flesh fade, and mortal trash
 Fall to the residuary worm; world' wild fire leave but ash:

肉体は衰え、死ぬべき運命の屑が

残る蛆虫に向かって倒れ、世界の鬼火が灰だけを残そうとも—

と描かれた「灰」(ash)に匹敵する。地獄の魂が自分自身により自分を分解しつくす状態である。語り手は、「もっと悪い」(worse)という言葉で現在生きている「私」の状態と墮獄の魂の永遠の死の現実とを比較する。この「灰」という生命のかすは、‘(Carrion Comfort)’では、語り手の目の前に「うずたかく積もるもの」(me heaped there)であり、それは語り手自身のようにもあった。自分が自分自身を分解しつくし、無に帰する地獄の魂の最後の姿が示唆される。

概して、アビラの聖テレジアの地獄の幻がイグナチオの『霊操』の形で黙想されたホプキンスの「地獄の黙想」と彼の晩年のソネット群とは、深い内容的な関わりがある。この「地獄の黙想」での墮獄の魂に関する見方は、そのまま晩年のソネット群の自己認識につながっている。テレジアの「魂自身をばらばらに引き裂くのは、魂自身である」という見方は、ホプキンスの「地獄の黙想」に見られる「われわれは我々自身の苦しめ手なのである」という見方に通じる。この自己認識は晩年のソネット‘(Carrion Comfort)’や‘I wake and feel’に貫かれており、前者の夢魔や後者の「呪い」(the curse)は、語り手を襲う怪物として描かれている。それらは、「地獄の黙想」の中の墮獄の魂を苦しめる彼らの〈自己〉である。自己とは、矛盾存在である。自己がこのように捉えられると、それは無限循環的なものとして意識される。それは“My own heart”に否定的だが明確に描かれることになる。

初期のホプキンスの詩では、自己と超越者とが主観・客観の二項対立で求められるが、この見方は晩年変化し、自己は～は自己との関わりで捉えられるようになる。この変化の過程で、彼の霊操「地獄の黙想」と晩年のソネット群でのイメージ展開とが不可欠だったようだ。地獄についての霊操が、晩年の優れたソネット群を産み出す基礎となった、とも言える。

注

1. Christopher Devlin, S. J., ed., *The Sermons and Devotional Writings of Gerard Manley Hopkins*, (London: Oxford Univ. Press, 1959), p. 107. 以下Sと記す。この著作の内, “Spiritual Writings” (以下『霊的著作』を訳す)の訳文は筆者による。
2. S. 131-142.
3. 中村徹, 「ホプキンスの “Carrion Comfort” 再考」 *Nondum*, 4, (日本ホプキンス協会関西支部, 1984年), 53-62頁。
4. S. 262.
5. *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges*, ed. Claude Collier Abbott, (London: Oxford

- Univ. Press, 1935), p. 221.
6. Norman H. Mackenzie, ed., *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Oxford: Clarendon Press, 1990), p. 447. 詩のテキストは W. H. Gardner and N. H. Mackenzie, eds, *The Poems of Gerard Manley Hopkins*, 4th ed., (London: Oxford Univ. Press, 1967) 所収のもの。
7. Norman H. MacKenzie, *Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins* (London: Thames and Hudson, 1981), p. 186.
8. S. 290.
9. S. 138. *The Journal and Papers of Gerard Manley Hopkins*, ed., Humphry House (London: Oxford Univ. Press, 1959), p. 238.
10. *Autobiography*, xxxii, *Complete Works of St Teresa*, trans. E. Allison Peers (London, 1946), I, 216. (S. p. 290.) 日本語訳は筆者による。
11. ホプキンズはテレジアのいう地獄の火を「僕が思うにはこの同じ火は、暗闇と鎖、あるいは幽閉と呼ばれるべきものだ」(this same fire I suppose to be called darkness and chains or imprisonment [S. 137]) と述べた。彼の晩年のソネットには、闇は描かれているが、火は一部の例外を除き描かれていない。テレジアにとって「地獄の火」は「闇」と同義である。ホプキンズの暗いソネット群に火が描かれていない理由は、ここにある。
12. S. 241-244. 最後の審判の後、肉体を失った魂はまた肉体とひとつになるが、罪を犯した肉体は、永遠に変わらぬ罰を受ける。
13. S. 243.
14. S. 241.
15. ホプキンズ詩の訳文作成にあたっては安田章一郎、『新版 G. M. ホプキンズ研究』(清水弘文堂、1983 年) 所収のものを参考にした。
16. *Journal*, p. 238. ホプキンズはこの『日誌』で、自分がその夜に見た悪夢について描き、それがテレジアの見た地獄の幻と似ている、と述べた。
17. アビラの聖テレジアの「神の憐れみの人生」の高橋テレサ訳では、「壁にほられた穴のようなところ」となっている。〔高橋テレサ 訳、鈴木宣明 監修、『アビラの聖テレサ「神の憐れみの人生」下』140 頁。〕
18. この『日誌』での金縛りの状態は、神の聖なる聖名にかけて叫ぶ詩人の叫びによって、解消される。そして詩人は「次第に元気づいた。」とある。この様子は、「いやすべてのあの苦労、あの混乱の中で、わたしは鞭に、/ というよりは手に、口づけした(気がする)ので、/ わたしの心は ああ、力をなめ、欲びを盗み、笑い、欲呼しようとした。」(“Nay in all that toil, that coil, since (seems) I kissed the rod, / Hand rather, my heart lo! lapped strength, stole joy, would / laugh, cheer.”) という ‘Carrion Comfort’ 描写を連想させる。
19. *Journal*, p. 174.
20. S. 138.
21. 「意識からの物の絶対的超越性そのものの意識」こそ「嘔吐」である。〔竹内、54 頁。〕
22. 主客転倒は、ソネットの 5-8 行とその前の 1-4 行で行なわれる。5-8 行では怪物は「あなた」(thou) と呼ばれ、被行為者である「私」(me) の視点から眺められる。その前の 1-4 行では〈怪物〉「私」(I) の視点から被行為者である「腐肉」(carrion) が眺められる。この腐肉は「私」(me) のものである。‘I wake and feel’ では、語り手「私」は、当初自分の主観的部分を擬人化して「心」(“heart”) と呼んだ。

そして彼は「心」(heart)を「お前」(you)と呼ぶ。語り手は「われわれ」という1人称複数の人称代名詞で「私」と「心」とを一括りにする。「心」は語り手自身と同じく地獄を見た「証人」(witness)として描かれる。語り手は自分が見た闇の信憑性を高めるために「心」という証人を呼び出す。しかしながら、自己は観察主体である「私」(I)と観察対象である「心」(heart)とに分断されている。このような「心」の物象化に限界がある。‘My own heart’の冒頭では、語り手の主観部分を描く heart, me, self, mind が、それぞれ分かちがたくつながってゆく。heart は let という動詞で me とつながり、me は live kind to という動詞句で self とつながり、heart はまれな他動詞用法の live によって tormented mind 「(苦しめられる精神)」とつながり、tormented mind はさらに mind tormenting yet 「(なおも苦しめる精神)」につながってゆく。自己とは、自己の自己自身への関わりであることが、このソネットでは示されている。

23. さらに、このソネットでは、「だが誰を歓呼するのか？ その天に触れる手がわたしをほうり出し、/ その足がわたしを踏んだ英雄をか？ それとも彼と闘ったわたしをか？ / ああ どちらだ？ どちらもか？」(“Cheer whom though? The hero whose heaven-handling flung / me, foot trod / Me? or me that fought him? O which one? is it each one?”)と過酷な闘いの末でさえ、その闘いの勝者を語り手は決められない。その理由は、私と怪物とが実は同一存在である、という事実に基づき始めたことによる。
24. 語り手はカインの呪いに支配され永遠に流浪するものとなる “St. Winefred’s Well” の悪漢キャラドックとなる。彼にはカトリック教会からの「破門」(curse)の烙印が押されている。
25. S. 241.
26. Virginia Ridley Ellis は、このソネット冒頭の触覚イメージと 1878 年の *The Wreck of the Deutschland* の第一連の「くり返し 私はあなたの指を感じ、あなたを見つける」(“Over again I feel thy finger and find thee.”)という表現との関連を指摘した。*Wreck* の語り手が感じた神の触覚は、しかしながら、晩年のソネットでは消えさる。[Virginia Ridley Ellis, *Gerard Manley Hopkins and the Language of Mystery* (Columbia: University of Missouri Press, 1991), p. 264.]
27. 動詞 sweat には、「発酵する」という意味もある。墮獄の魂には、本来、「悪意と邪悪のパン種」が発酵し、充滿しているはずだ、と当初、詩の語り手は考えていたようだ。パンの練り粉は酵母菌 (yeast) で急激に膨らむはずだ。パウロが「わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。いつも新しい練り子のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。」と述べ、「悪意と邪悪のパン種」が練り粉を膨らませることを警戒した。一方、地獄の魂の発汗は、失楽園後のアダムの労働による汗と同じく、罪を償う作用がある [Mackenzie, Reader’s Guide, p. 183]。それは神の天地創造の時の発汗と同じ、創造的、肯定的な意味合いがある [世界シンボル大事典, 787-89 頁。]しかし、地獄の魂の現実とは、もっと否定的なものだ、というのがこのソネットのメッセージである。
28. 金光仁三郎訳、『世界シンボル大事典』(大修館書店, 1996 年), 753 頁。

(経済学部教授・英文学)